

できる喜びを実感させる器械運動の指導法について —「分かる」と「できそう」から「できる」へ—

佐渡市立前浜小学校
黒田 哲平（平成 14 年度）

〈主張〉

本実践の目的は、器械運動の領域において、児童が対話を通して技を知り、自己の能力に合わせた目指す動きのイメージをもって練習に取り組むことで、運動技能を高め、できる喜びを感じることである。本実践の目的を達成するためには、思考し得た技の知識「分かる」と、今までの運動経験と仲間との関わりを通した「できそう」の思いから、なりたい自分を具体的に思い描かせることが必要である。そして、児童になりたい自分を具体的に思い描かせることによって、見通しをもって主体的に練習に取り組むようになり、さらに「できそう」が「できる」に変わっていく過程が達成感を与え、できる喜びを感じさせることができると考える。

1 主題設定の理由

本校の児童の実態として、今までの学習の振り返りでは、運動技能が高まったことに関する記述をする児童が少なく、技が完成したかしていないかの判断の記述が多かった。また、運動が得意な児童はできる喜びを感じている記述が多かったが、運動の苦手な児童は「次は、もっとがんばりたい」等の前向きに捉えることができる記述はあるものの、全体的にネガティブな内容の記述が多かった。児童 1 人 1 人が自分の成長に気付き、できる喜びを感じる授業ができていなかった結果だと受け止めている。本実践では、運動が苦手な児童にもできる喜びを感じさせることを課題とし、手立てが有効であるかを検証していく。

学習指導要領（2017）では、「体育の見方・考え方とは、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けることである」と示している。この内容を踏まえ、前述の課題を解決するために、授業の中に 2 つの場面を設定した。対話による技を知る「分かる」場面と、自己の能力に合わせた目指す動きをイメージし、「できそう」の思いをもたせる場面である。この 2 つの場面設定が、運動が苦手な児童にも自分の成長に気付く機会を与え、できる喜びを感じさせることができると考える。

2 研究仮説

〈研究仮説〉

児童が対話を通して技を知り、自己の能力に合わせた目指す動きのイメージをもって練習に取り組むことで、できる喜びを感じることができるだろう。

3 研究の内容

実践 1・2

(1) 対象

【実践 1・2】令和 4 年度 佐渡市立前浜小学校 3 年～6 年（男子 5 名、女子 6 名 合計 11 名）

(2) 単元について

【実践 1】単元名「マット運動」（全 8 時間） 【実践 2】単元名「跳び箱運動」（全 8 時間）

(3) 研究方法

- ・ 1 つの技（系統性のある技）を 2 時間で扱う単元構成にする。
- ・ 異学年グループ（1 グループ 3・4 人）を編成する。
- ・ ①対話による技を知る「分かる」場面 ②自己の能力に合わせた目指す動きをイメージし、「できそう」の思いを引き出す場面 の 2 つの場面を設定する。
- ・ 2 つの場面に合わせて手立てを講じる。

- ・2つの手立てを分析し、有効であったかを振り返りの記述で検証する。

手立て1 (①対話による技を知る「分かる」場面)

技が完成するまでの一連の動きを示し、各グループでの対話を通して、気付いたことやコツを書かせる。【与えられた情報から、自分たちの活用できる情報への変換】

- (a) 技の動画と技のポイント（参考例）を全体で確認する。

【技のイメージの共有・指導内容の確認】

- (b) 各グループでの対話を通して、自分たちの言葉で気付いたことやコツをワークシートの吹き出しに書く。

【技の全体像を捉える】

*試技を繰り返しながら加除・修正し、より自分たちの活用できる情報に変換していく。

手立て2 (②自己の能力に合わせた目指す動きをイメージし、「できそう」の思いをもたせる場面)

技が完成するまでの一連の動き（手立て1）を基に目指す動きをイメージさせ、「できそう」の思いを本時の課題にさせる。

- (a) 今までの運動経験を想起させ、「自分が今どの段階で躓いているのか」を確認する。

*想起できない児童は、試技の様子を動画で撮影し確認する。

- (b) 「次の段階に進むためには、どんなことに気を付けて練習すればよいのか（気付いたことやコツを活かして）」を意識して、自分の本時の課題を設定する。

- (4) 検証方法 *2つの手立ての分析結果を基に、児童の振り返りの記述を検証する。

・分析①【場面①の手立て】：技が完成するまでの一連の動きについての気付いたことやコツの発言の回数の変化

・分析②【場面②の手立て】：技が完成するまでの一連の動きについての気付いたことやコツを活かし、自分の能力に合わせた課題設定をしている児童の人数の変化

○2つの手立てについて、録音した実際の児童の対話を分析する。

〈壁倒立〉グループでの対話（一部抜粋） マット運動 第6時「壁倒立・ブリッジ」	〈台上前転〉グループでの対話（一部抜粋） 跳び箱運動 第6時「台上前転」
C1.足を上げているけど、壁まで届かないよ… C2.やってみて。 *C1が試技をする。動画で確認 C1.思っていたよりも足が上がっていない… C2.最初が弱い（蹴る）から、足が上がらないんじゃない。 C3.壁を意識し過ぎじゃないかな？<u>マットを見るようにしてみたら？</u> C1.前に6年生に教えてもらったようにしているけど… *しばらく考える。 C2.マットに印を付けたら？ *マットにカラーテープで印を付ける。 T.足だけではなくて、おしりを上げることに気を付けてみたら？ C2.<u>おしりを上げると足も上がるかもね。</u> C1.うーん… C3.体がまっすぐになるからいいんじゃない？ C1.そうかも…やってみる。 ◎自己の能力に合わせた目指す動きをイメージし、「できそう」の思いをもつことができた姿 C2.マットを見ておしりを上げればできそうじゃない？	C4.跳び箱の上で前転するのは、こわいよ。 C5.<u>ロイター板をしっかりと蹴ると、勢いで回れるよ。動画でも結構強く蹴っていたよ。</u> C4.分かるけど… C6.わたしも低い段から練習するから、一緒にする？ *低い段でC1が試技をする。回ることはできたが、技がぎこちなく、本人も納得していない。 C6.<u>跳び箱におでこが先についているから、回りづらいんじゃない？</u> *動画で確認 C4.確かに… C6.わたしも同じかも… C4.どうすればいい？ C5.<u>頭の上をつけるようにしてみたら？</u> C4.どういうこと？ *しばらく考える。 T.マット運動の時と同じで、おへそを見るようにしてみたら、いいんじゃないかな？ C4.そういうこと？ C5.それぞれ。 C6.<u>わたしもそれにしよう。</u> C4.<u>おへそを見て回ればいいんだね。</u> ◎自己の能力に合わせた目指す動きをイメージ

	し、「できそう」の思いをもつことができた姿
分析①「気付いたことやコツの発言の回数」 ・下線部分…6回	分析①「気付いたことやコツの発言の回数」 下線部分…5回
C1の本時の課題設定 「マットを見て、おしりを上げる。」	C4の本時の課題設定 「おへそを見て、頭の上をつけるようにする。」 C6の本時の課題設定 「ロイター板をしっかりとけって、おへそを見る。」
分析②「気付いたことやコツを活かし、自分の能力に合わせた課題設定をしている児童の人数」 ・波線部分…1人	分析②「気付いたことやコツを活かし、自分の能力に合わせた課題設定をしている児童の人数」 ・波線部分…2人

○検証【できる喜びの実感】:「できた」「できるようになった」「うれしかった」「楽しかった」等のプラスの記述をした数

〈壁倒立〉C1の振り返り	〈台上前転〉C4の振り返り
わたしは、友達からおしりを上げることのアドバイスをもらいました。地面を思いっきりけったら、 <u>かべに足がつくようになりました</u> 。友達にほめてもらえて <u>うれしかった</u> です。次は、もっと長くかべに足がつくようにしたいです。	〇〇さんのアドバイスをいかして、頭の上をつくことを <u>意識することができた</u> 。試してみたら、前よりもおへそを見ることが <u>できるようになった</u> 。手のつき返しも前よりも <u>できるようになって</u> 、初めて5段で台上前転ができてうれしかった。
検証「できる喜びを実感するプラスの記述をした数」 ・下線部分…2回	検証「できる喜びを実感するプラスの記述をした数」 ・下線部分…4回

4 研究の結果と考察

実践1の結果

単元名「マット運動」(全8時間) * ()内は、運動が苦手な児童の数値

運動が苦手な児童(6名)…学習内容の0~2つの技が完成している。

時	学習内容		分析① 【発言の回数】	分析② 【課題設定:児童の数】	検証 【記述の数】
1	前転・開脚前転		1 9 (3)	4 (0) / 1 1	9 (0)
2			2 2 (4)	6 (1) / 1 1	1 2 (1)
3	後転	開脚後転	1 8 (3)	6 (1) / 1 1	1 0 (0)
4			2 0 (4)	7 (1) / 1 1	1 0 (1)
5	壁倒立 ブリッジ	倒立ブリッジ 倒立前転	2 4 (5)	6 (0) / 1 1	1 1 (1)
6			3 2 (5)	9 (3) / 1 1	2 4 (4)
7	倒立 側方倒立回転	ロンダート ハンドスプリング	1 9 (3)	5 (0) / 1 1	1 3 (1)
8			3 5 (5)	9 (3) / 1 1	2 6 (5)

実践1の考察

* 系統性のある技を2時間で1つのかたまりとして単元を構成

- ・分析①から、1つのかたまりの奇数回に比べ、偶数回の方が発言の回数が増え、対話が活性化することが分かる。奇数回の試技を通して新たなコツに気づき、児童が対話による技を知る「分かる」の必要性を感じていたと考えられる。
- ・分析②から、1つのかたまりの奇数回に比べ、「できそう」の思いを本時の課題にしていることが分かる。偶数回で対話が活性化することで、児童がより鮮明に自己の能力に合わせた目指す動きをイメージし、「できそう」の思いをもつことができたと考えられる。
- ・分析①と分析②では、共に偶数回の数値が上がっているが、検証結果の第1時から第4時までの数値に変化が見られなかった。ほとんどの児童がすでに技が「できる」ようになっていたことで、新たな「できる」喜びを感じる事が少なかったことが要因であると考えられる。
- ・第5時、第7時の検証結果の数値も変化が見られなかった。しかし、第5時、第7時は、当校児童が苦手としている倒立系の技が原因だと捉えている。偶数回で検証結果の数値が大きく上がっていることから、技の難易度が高くなるほど、対話による技を知る「分かる」として、自己の能力に合わせた目指す動きをイメージし、「できそう」の思いをもたせることが、「できる」喜びを感じさせるこ

とに有効であると考えられる。

実践 2 の結果

単元名「跳び箱運動」(全 8 時間) * () 内は、運動が苦手な児童の数値

運動が苦手な児童 (6 名) …学習内容の 0~1 つの技が完成している。

時	学習内容		分析① 【発言の回数】	分析② 【課題設定:児童の数】	検証 【記述の数】
1	開脚跳び		2 2 (3)	6 (1) / 1 1	1 2 (2)
2			2 7 (4)	8 (2) / 1 1	2 1 (5)
3	抱え込み跳び		2 5 (5)	7 (2) / 1 1	1 8 (4)
4			3 4 (7)	9 (4) / 1 1	2 7 (6)
5	台上前転	頭はね跳び	3 1 (5)	8 (2) / 1 1	2 5 (5)
6			3 8 (8)	1 0 (4) / 1 1	3 4 (9)
7	苦手な技に挑戦	頭はね跳び	3 7 (7)	9 (4) / 1 1	3 2 (7)
8		首はね跳び	4 1 (9)	1 0 (4) / 1 1	3 8 (10)

実践 2 の考察

* 系統性のある技を 2 時間で 1 つのかたまりとして単元を構成

- ・実践 1 と同様に、偶数回で分析①と分析②の数値が上がっていることから、偶数回では奇数回よりも児童が対話による技を知る「分かる」の必要性を感じ、より鮮明に自己の能力に合わせた目指す動きをイメージできるようになり、「できそう」の思いをもつことができたと考えられる。
- ・第 4 時、第 6 時、第 8 時の偶数回で検証結果の数値が上がっていることから、技の難易度が高くなるほど、または苦手な技に繰り返し挑戦するほど、対話を活性化させて技を知る「分かる」ことと、「できそう」の思いをもたせることが、「できる」喜びを感じさせることに有効であると考えられる。

5 成果と課題

〈成果〉

- ・対話による技を知る「分かる」ことと、自己の能力に合わせた目指す動きをイメージし、「できそう」の思いをもたせることは、児童に「できる」喜びを感じさせることに有効であった。また、技の難易度が高くなるほど、または苦手な技に繰り返し挑戦するほど有効であった。
- ・授業の回数を重ねるごとに、児童が「分かる」と「できそう」の 2 つの手立てをうまく活用できるようになり、運動が苦手な児童にも「できる」喜びを感じさせることができた。

〈課題〉

- ・難易度が高い技の授業では、安全面への配慮と異学年体育による対話の停滞を予想し、児童の「できそう」の思いをもたせる場面で教師も対話に入り、問い返しをしたり、児童の発言を分かりやすい言葉に言い換えたりした。対話は活性化し、児童に「できそう」の思いをもたせることができたが、教師の支援も有効に働き、分析結果として表れたとも考えられる。
- ・本研究では、「分かる」と「できそう」の 2 つの手立てを通して、「できる」喜びを感じさせることを目的とし達成できたが、「できる」喜びを感じることと運動技能の高まりを同列で扱ってよいのかという新たな疑問が生まれた。
- ・極小規模校であるため、児童の見取りが容易にでき、児童の躓きに気付きやすい。児童の困り感に寄り添って授業を展開し、手厚い支援をすることができたが、児童数が多い場合にも本研究の 2 つの手立てが有効であるのか、また手立てのよりよい工夫についても検討していきたい。

引用参考文献

- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 体育編』東洋館出版社、2017
- 平川 譲『体育授業に大切な 3 つの力』東洋館出版社、2018
- 荻原 朋子『仲間学習モデルの体育授業への適用過程とその効果』体育科教育学研究論文、2015
- 鈴木 直樹『GIGA スクール時代における体育の「主体的・対話的で深い学び」』創文企画、2021
- 梅澤 秋久『体育における「学び合い」の理論と実践』大修館書店、2016